

た ち ば な 新 聞

発行所 宝清寺
〒197-0821
東京都あきる野市小川101
電話 042-558-2663

秋彼岸(ハハツミヨロ)
九月二十日から二十三日
お彼岸にはお塔婆を立て、お花をお供えしてご家族で墓参致しましょう



宝清寺の年中行事

二月節分	厄除け・星祭
三月彼岸中日	彼岸塔婆供養
四月八日	花まつり(灌仏会)
四月八日	オリエンテンプリンダ
七月十七日	お盆塔婆供養
七月十七日	施餓鬼法要
九月彼岸中日	彼岸塔婆供養
十月十二日	お盆式法要
十二月初旬	お盆締札

コロナ禍に振り回される状況は、収まりを見せていませんが、秋のお彼岸を迎えることになりました。お彼岸の行事が日本で行われるようになったのは『日本書紀』によると、七八五年に亡くなつてから祟りを巻き起こしたと言われている崇道天皇(早良親王)の霊を鎮めるために、全国の国分寺に向け、彼岸会として「七日金剛般若経を讀まわしむ」として七日間経を讀むことが命ぜられたそうです。これが「彼岸会」となりました。

この「彼岸会」は、やがて一般人民の亡き人々を供養する行事として定着していったと言われています。「彼岸会」は仏事として行いますが、他の仏教国では見られない行事です。

日蓮聖人のご遺文『開目抄』に

『**亀鏡なければ我が面をみず**』

とあります。

住職ひと口法話 第七十四回

令和四年の出生数は、統計以来、初の八十万人割れ、一方、死亡者数は一五八万人を超え、統計以来最多となり、日本人の人口は、昨年度だけで約七十八万人減少したそうだ。人口減少は社会的にも寺院にとっても大きな影響を及ぼしている。親戚や近所・知人関係などで営んできた葬儀や法事も簡略に営むようになった。コロナ禍では、通夜の無い一日葬、火葬のみの直葬が増え、枕経→通夜→葬儀→初七日という従来の葬儀内容が変化した。そんな中、今年六月にお檀家のSさんが亡くなられた。コロナ禍が収まらない状況であったため家族と親戚だけの葬儀でした。後日、Sさんの娘さんと息子さんが、父親の四十九日忌の打ち合わせにお見えになり、日程や供養の内容が決まった。帰りがけに娘さんから、埋葬の時一緒に納めるよう写経をしたいと思います、どうしたら良いかと相談がありました。良いことですねと返事をして、「自我偈」の手本と練習用紙・清書

『開目抄』は日蓮聖人が流罪となった佐渡で著されたご遺文で、自身のあり方を問い、どう生きるべきかの覚悟が示されています。私たちが今をどう生きていくのか。そのヒントが詰まっています。『亀鏡』は正式には「きけい」と読み、一般的には「手本」となるもの、模範の意味で、昔は亀の甲羅を焼きその割れ方で吉凶を占っていたことと、鏡は真実や様々なモノを写すことが理由のようです。人間はできれば、いやな人や苦手な人からは、距離をおきたいと思ったり、いやな仕事や苦手な仕事はしたくないと思いがちです。しかし、人間はお互いが関わり合って生きています。いやな仕事でも苦手な仕事でも、仕事は必要でいやだからといって避けては通れないものです。

亀鏡がなければ、自分自身の顔も見えないし、自分の真の姿も見えない。そこで自分自身を第三者と捉えて客観的に見ると、今の自分の状態を冷静に把握することができるようになり、現状を自分の利害や感情を除いた観点で見用紙のセットを取り寄せた。念のため二部取り寄せ、届いたので連絡をし受け取りに見えた時、もう一部ありませんかと言うので、練習用紙二枚、清書用紙が三枚あるので充分ですと伝えると、弟も写経したい、海外出張があるので出張先のホテルで写経するのだと言う。私は故人を思う姉弟の気持ちに感動を覚えた。そしてふと、今の世の中は自我自欲の傾向が強い。僅かでも他人に思いやりの気持ちをかけられないものか、と思った。

昭和四十年に公開された黒澤明監督の「赤ひげ」は、山本周五郎の「赤ひげ診療譚」が原作で、小石川養生所の先生は、精神を患った患者さんと一緒にお風呂に入り、患者さんに背中を流してもらい、先生は自分は背中に手が届かないので「気持ちよかったです」と、患者さんに声をかけると患者さんは、自分でも人の役に立てるのだと症状がよくなった話が書かれている。

親に感謝の気持ちを表すことと同じようにはいかにまでも、自分では手の届かない背中を流してもらい、それに対して「ありがとう」と言えるような、ささやかな思いやりを掛け合う世の中にできないものだろうか。

つめることができるのではないのでしょうか。そのように考えると、自分と接する人はみんな自身自身を写してくれる鏡と考えられ、「違う自分」「自分の長所・短所」などの再発見に繋がるのではないのでしょうか。お彼岸の期間に、ご先祖や故人、周囲にいる人は、良くも悪くもお手本を示してくれる人と考え、自身を客観的に見つめ直す機会にされることをお勧め致します。

お墓の承継にお悩みの方

近年、お墓の承継問題を抱えてお悩みの方も多くなり、宝清寺に墓地をお持ちの方からの相談を受けることも多くなりました。

心おきなく日々をお過ごし頂くために、宝清寺では、お墓の承継問題の対応策として、永代供養納骨堂「睡蓮堂」・「蓮華堂」の他、既にご案内のとおり、樹木葬「天空・友情の郷」を新設し販売を開始致しました。



- 写真上 「睡蓮堂」(本堂脇)
- 写真中央 「蓮華堂」(本堂内)
- 写真下 「天空・友情の郷」

また、墓地の承継者がいないとお悩みの方で、建立されたお墓を残したいと希望される方には、他寺院では見られない永代供養墓への切り替えを、また、お墓を撤去し墓所の返還を希望される方には、永代供養納骨堂「睡蓮堂」「蓮華堂」や新設の樹木葬「天空・友情の郷」を提案しています。

いずれの場合も、宝清寺が責任を持って永代供養致しますので、お悩みの方は、ご遠慮なく、管理事務所にご相談下さい。

法華経と私たち 第十八回

分別功德品 第十七

そのとき釈尊は、弥勒菩薩に告げた。「阿逸多よ、わたしの如来の寿命の悠久なることを説いているあいだに六十八のガンジス川の砂の数に等しい衆生が、不生不滅の法を会得したのである。また、その千倍、一千万倍、二千万倍、三千万倍の微塵の数に等しい菩薩たちが、退くことのない境地の法輪を転じたのである。また、中千世界、小千世界の微塵の数に等しい菩薩たち、また、四つの四大州、三つの四大州、一つの四大州の微塵の数に等しい菩薩たちが、生まれ変わって、阿耨多羅三藐三菩提を得るだろう。また、八つの三千世界微塵の数に等しい菩薩たちが、菩提心を起こしたのである。釈尊がこのように説いたとき、虚空から曼荼羅華が降ってきて、宝樹のもとに座する幾千万億の諸仏の上に散り、また、七宝の塔に在る釈迦牟尼仏と多宝如来の上に散り、また、妙香の会衆の上に散ってきた。梅檀の香が香り、天の鼓が鳴り、天の衣が空中にただ

よい、様々な宝玉が天に飾られた。一人一人の如来の頭上にかかげられた天蓋は、空たかく天の頂まで連なっていた。

釈尊はまた弥勒菩薩に告げた。「阿逸多よ、仏の寿命の悠久なることを聞いて心から信ずるものは、限りなく功徳を得ることだろう。また、その言葉の本質を理解するものは、限りなく仏の智慧に近づき、また深く理解すれば、仏が靈鷲山にいて僧たちに説法しているのを見るだろう。この娑婆世界は地は瑠璃からなり、平坦で、八道は金で境界をなし、宝樹は林立し、様々な樓閣は宝玉で飾られ、菩薩たちが住んでいるだろう。また、わたしの入滅ののちに、この経を聞いて随喜の心を起こせば、それは先に述べた深く信じ理解するものと同じ功徳を得るだろう。まして、この経を持ち、読み、誦するものにおいてをや。この人は如来を背に頂いているのである。この人はわたしのために、塔を建て、僧坊を作り、衣服、寝具、食事、湯薬等で供養する必要はない。すでにそれに値することをなした

からである。わたしの入滅ののちに、この経を聞き、持ち、自分で書き、人に書かせる人は、僧坊を建て、三十二の美しい殿堂を作り、千人の僧が住み、林や池があり、修行に必要なものがすべて備わっている大きな僧院を建てたのである。このような僧院を数限りなく建てたと同じほどの功徳を積んだのである。それゆえ塔寺を建て、僧坊を作って供養する必要はないのである。ましてこの経を保持し、同時にできる限りの努力を重ね、布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧の道を行ずる人においてをや。その人の功徳は、虚空に果てがないように限りがなく速く一切種智に到達するだろう。

またもし、この経を読み、誦し、他人のために説き、自分も書き、または人にも書かされれば、塔を建て僧坊を作り幾多の菩薩の功徳を賛嘆し、もって布施行となし、他人のために正しく法華経を解き明かし、柔和なるものと共に住んで清浄に持戒を守り、怒りなくよく忍辱し、志は堅固に精進し禅定を貴び、深く諸法を解する智慧を得て、よく難問に答えるようになるだろう。

この人は菩提樹下に座して阿耨多羅三藐三菩提の境界に入り、この人の举措した処には塔を建てるべきであり、仏のように供養されるべきである。

釈尊は重ねて詩句をもつて唱えた。

宝清寺本堂建物の最新報告



たちばな新聞第一二三号で、君島登氏が本堂を新築し奉納されるお知らせをしてから檀信徒の皆様より、本堂建設について、いつ工事が始まるのですかとのお訊ねが多くあり、皆様の関心の高さが窺えます。

本堂建設について、設計図は完成し、建築会社も決まっていますが、現在の本堂より良い本堂にしたいと細部に亘り綿密な打ち合わせが続いております。間もなくまとまり、着工に入る予定です。慎重に検討を重ねているのが屋根で、当初、銅拭きの屋根を計画していましたが、他寺院で使用されたような材料で仕上げる事を検討しています。



また、現在お祀りしている本尊、鬼子母神、八幡様、蓮華堂の配置、及び、君島登氏が所有している一ノ刀彫り、三メートルの千手観音像(上の写真)を奉納して頂きたいことになり、その設置場所などの検討を重ねています。

観音様を知る

君島氏から千手観音像が奉納され、お祀りすることになったことから、観音さまについて知って欲しいと思えます。

私たちは普通、「観音さま」と親しみを込めて呼んでいます。正式には「観音さま」の原名はアヴァローキテーシユヴァという梵語で、「観世音菩薩」、または「観自在菩薩」と呼びます。それを略したのが「観音」即ち「観音さま」となります。

観音さまは仏教における代表的な救世の「ほとけさま」です。「観世音」と訳した場合、世の人々の救いを求める声(音)を聞く(観)と直ちに救って下さる、という慈悲を意味します。「観自在」と訳した場合は、一切諸法を自由自在に観察する、という智慧を意味します。

しかも、「観音さま」は苦悩の現実をそのまま楽土とし、浄土と化しておら

令和五年度管理料納入のお願い

管理料は、毎年、三月末日が納入期限の前納制になっています。令和五年度の管理料及び複数年未納の方は、早めにお納め頂きますようお願い致します。

納入方法

- 一 墓参の折、持参にて納める
- 二 銀行振り込みにて納める

※振り込みの場合の振込先

銀行名 多摩信用金庫 秋川支店
口座番号 普通預金 一五一六二四九
受取人 宗教法人宝清寺代表役員 石井 前琮

三 自動払い込みにて納める

※自動払い込みの場合の手続き方法

- ① 自動払い込みはゆうちょ銀行のみです。ゆうちょ銀行に口座をお持ちの方が対象になります。
- ② 自動払い込みご希望の場合は、管理事務所指定用紙をご請求頂き必要事項記入後、最寄りのゆうちょ銀行に提出して下さい。
- ③ 引き落としは、毎年四月二十五日になります。

尚、不明な点がございましたら、管理事務所までお問い合わせ下さい。

れると言われています。つまり、「観音さま」は世の中のすべての悩みを聞いて下さる「ほとけさま」なのです。観音さまのお経は「観音経」で祭式には「観世音菩薩普門品」のことで、普門品ともいいます。なぜ普門品とこのようにしようか。それは、観音さまの神通無碍な救世のはたらきを広大な門にたとえ、相手の悩みに応じて随時、その姿をかえて、救いの手をさしのべる普門示現の様子を述べているからです。経文ではまず長行(散文)で書かれ、偈(韻文)で締めくくっています。内容はもっぱら観音さまの御利益が説かれています。すなわち、七難(外からの災難)も三毒(こころの病)もみな仏への信仰によって救われ、二求願(男女のよき子宝を得る願)もすべてかなうと述べられています。また普門示現の具体的な姿として三十三身を挙げ、一心に供養すればいかなる苦難災害の中にあつても恐怖心を取り除き無畏の施しを与えてくれると説いています。この為、観音さまのことを施無畏者(人々の恐れを取り除く)と説いています。長行が終わり偈に移り、最後に「一切功徳を具え、慈しみの眼をもって衆生を視る。福の集まる海は無量である。それ故にまさに観音さまの御足をわが頭頂に」いたたくように礼拝しなさい」と結んでいます。



観音さまはすべての人を救うことを第一に考えます。時に三十三身(姿)を変え、その時々の救いを施します。君島氏は上記写真の三十三観音を所有しており、何体か奉納いただける事になっていきますので、本堂完成の折には是非、ご参拝ください。